第7章　北白川上層式土器の細分

——京都大学教養部構内ＡＯ24区出土の縄文土器を中心に——

泉　拓良

昭和47年11月，京都大学教養部図書館新営工事の時に，地表下約３ｍの地点から縄文土器が出土した(図版1－7)。この発見は，北部構内での縄文中期石棒の発見とともに，京都大学構内遺跡発掘調査の端緒となった。京都市文化財保護課の指導によって，工事を一時中断し，教養部人文地理学教授藤岡謙二郎が壁面の清掃と実測をおこなった。その成果の一部は発表されている〔藤岡73・78〕。工事のときに発見された資料は教養部に保管されていたが昭和53年に，藤岡教授の退官によって，当センターに移管された。その資料は，北白川上層式に属する土器であったが，同じ北白川扇状地に立地する北白川小倉町遺跡や京大植物園遺跡(図版1－11)出土の北白川上層式と若干異っていた。したがって，本章でその資料を紹介し，併せて北白川扇状地から出土した北白川上層式土器を３群にわけて考察を加えようとするものである。

1　教養部構内 AO 24区出土の縄文土器

保管している土器は，総破片数106点，うち器種を同定できたものは27個体，ほかに器種不明の底部２個体がある(第38図)。層位は不明であるが一時期の資料で，北白川上層式にあたる。器形で深鉢，鉢，浅鉢に大別し，文様で細分をおこなった。

深鉢Ａ類(V1)　頸部が強く外反する深鉢で，口縁部は内側に短く折れ曲がり，外面に文様を施す。波状口縁を呈し，波頂部に円形浮文があって，竹管状工具でその上端を刺突している。口縁部のそのほかの部分には，口縁と平行に２本の沈線を描き，縄文を施す。口縁部と頸部の内・外面とも調整は磨きである。V10は３本歯の櫛による条線を施した胴部の破片で，内面の調整は丁寧な撫でである。V11は弧状の沈線によって区画した中に縄文を施す破片で，内面の調整は丁寧な撫でである。両点とも本類の胴部の可能性がある。

深鉢Ｂ類(V7)　胴上部がくびれ，頸部が強く外反する深鉢で，口縁部は外側へ段状に肥厚するが，文様は内面に施す。波状口縁をなし，波頂部は２ないし３である。口縁部内面に口縁と平行に沈線を施し，縄文を充填している。波頂部下で沈線が弧状になり，波頂部を強調している。頸部と胴部とを１本の沈線で区分し，胴部には縄文を施す。調整は頸部内・外面とも磨きで，胴部内面が撫でである。胴部外面に煤が付着している。

深鉢Ｃ類(V3)　あまりくびれない胴部に，弱く外反する頸部がつく深鉢。口縁は水

平口縁で，端部は撫でによって外反気味に尖っている。口縁部文様帯がないという特徴がある。口頸部と胴部とを1本の沈線で区分し，頸部には4本以上の沈線束で鋸歯文を描き，胴部には左下りの垂下沈線を全面に施す。調整は内・外面とも粗い撫でである。

深鉢D類(V4)　胴のくびれない朝顔形の深鉢。水平口縁で，内面に1本の沈線を口縁と平行に描き，口縁との間に縄文を充填している。外面には，口縁と平行に7本の沈線を描き，縄文をその上に施文する。内・外面とも調整は磨きで，外面の磨きは縄文の一部を消している。

深鉢E類(V12)　破片のため器形の詳細は不明な大型の深鉢。頸部と胴部とを1本の沈線で区分し，胴部には同一原体による羽状縄文を施す。内面の調整は粗い撫でで，深鉢A類，同B類，鉢A類とは区別できたので本類として独立させた。

深鉢F類(V13)　箆状工具による数条からなる条線束を器面全体に施す深鉢。口径はかなり大きく，器壁は0.3cmと薄い。外面に煤が付着している。

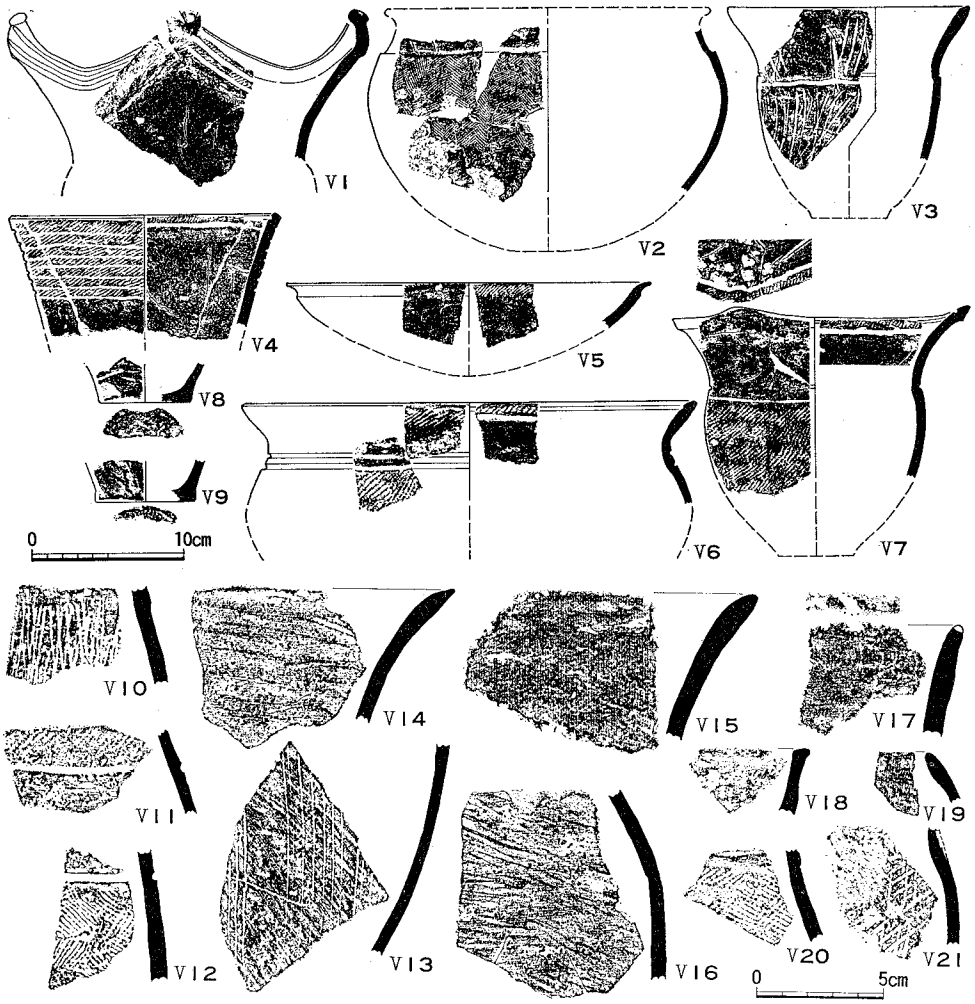
深鉢G類(V14～V17)　粗製の無文深鉢を一括した。口頸部が外反する深鉢（V14～V16)と垂直に近いもの(V17)とがある。外反する深鉢の口縁端部は，口縁内面の撫でによって外反気味で尖ったものになっている。一方，垂直に近いものは，口縁端部を丸く収め刻みを施している。V18・V19は粗製無文の土器であるが，口径が小さく，鉢になると思われる破片である。この類の調整には，巻貝条痕(V16)，原体不明の条痕(V14)，撫で(V15・V17・V19)がある。V18は調整が粗い磨きで，粗製の範疇に入れるか問題が残る。

鉢A類(V2・V6)　丸底で半球形に近い胴部に，外反する口頸部のつく鉢。胴部に同一原体による羽状縄文を施す土器(V2)と，斜行縄文を施すもの(V6)とがあり，調整は両点とも内・外面磨きである。胴部と頸部との境を，V2は段，V6は2本の沈線で区分している。V6の口縁部内面には，口縁と平行な沈線があり，口縁との間に縄文が充填されている。V20はこの類の胴部である。

鉢B類(V21)　鉢A類と同様と思われる器形で，胴部に斜格子文を描く鉢。内面は鉢A類と同様に丁寧に磨かれている。

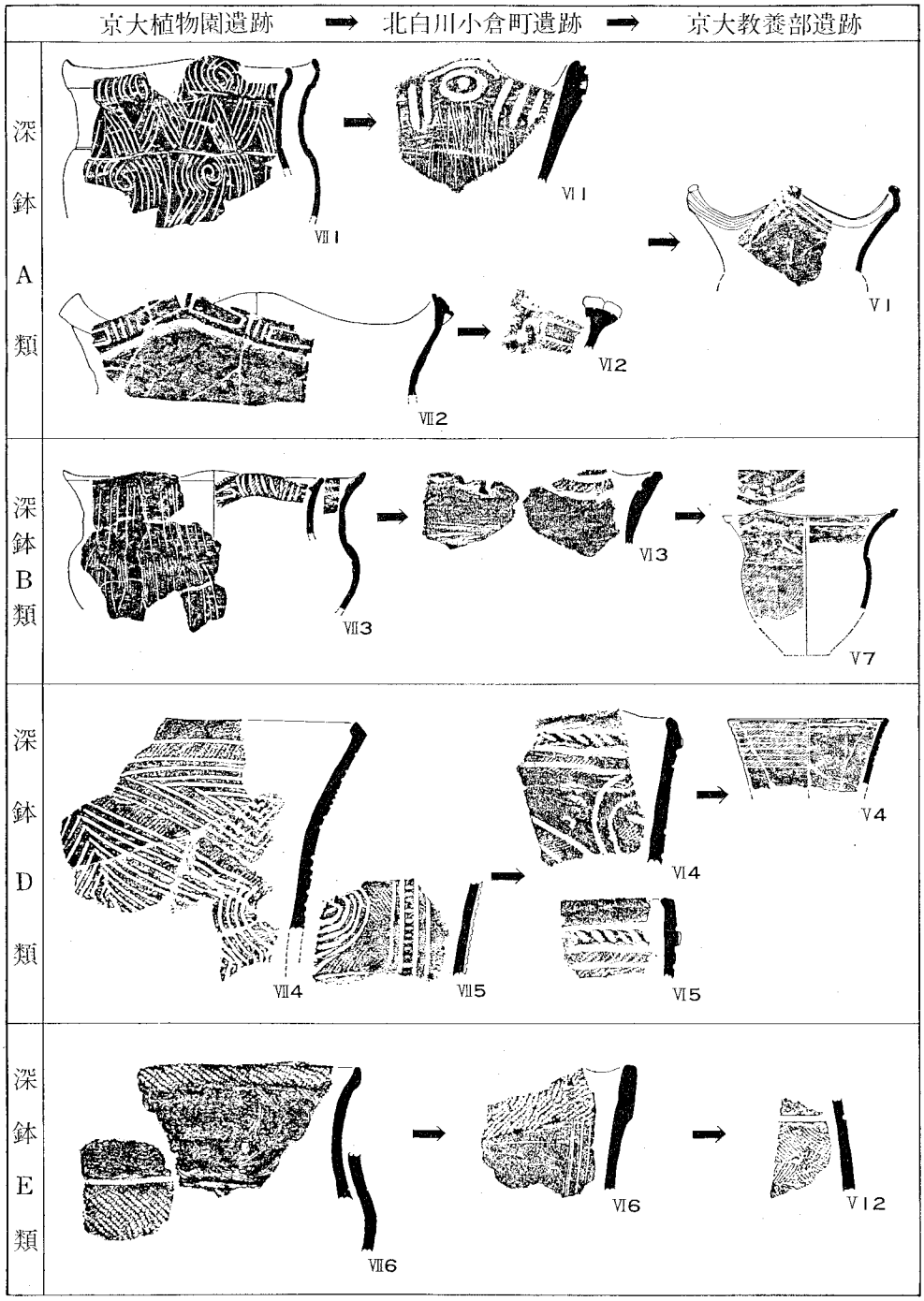
浅鉢(V5)　V5は指押えで凹線状になった口縁部をもつ浅鉢。口縁内面に縄文を施し，内・外面とも調整は磨きである。

底部(V8・V9)　V8は直径6cmで，中央がわずかに凹む。外側の約1cmの部分だけが磨滅している。調整は内・外面とも粗い撫でである。V9は直径6.6cmで，調整は内外とも粗い撫で。2点とも深鉢G類の底部である可能性が強い。

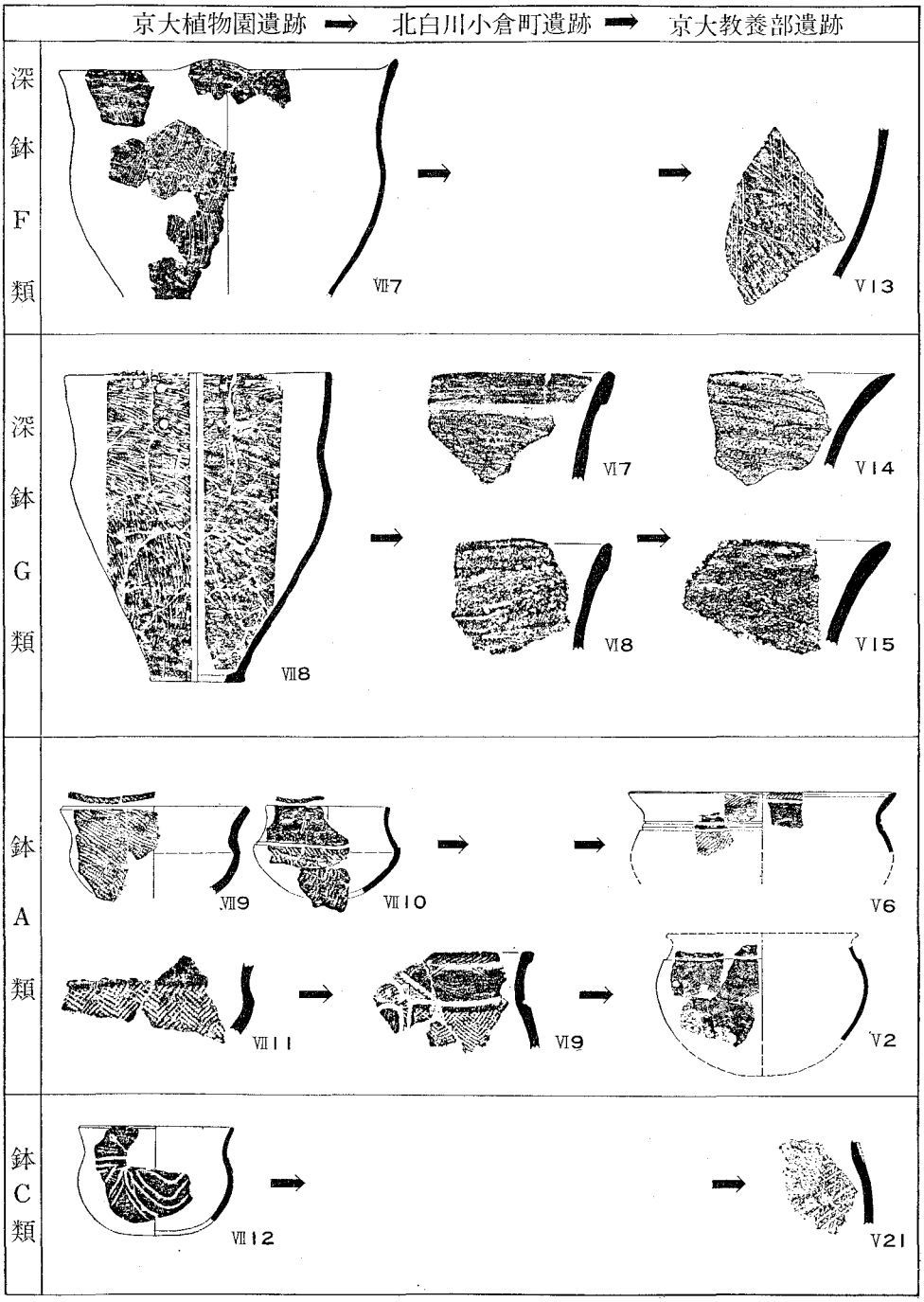


第38図　京都大学教養部構内ＡＯ24区出土の縄文土器

次に土器の細部と技法を検討する。縄文のある破片は10片で，そのすべてが２段右撚りのＬ$\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.$である。撚紐が施文された時の幅には，0.8 cm 前後のものと，1.5 cm前後のものとがある。これは，指１本で転がした時と２本で転がした場合と考えうる。同一原体を縦方向と横方向に転がして羽状縄文を作る時は，指１本で転がしている。この羽状縄文には二通りの施文方法があり，Ｖ２ではまず間隔をあけて縦に長く施文し，その間を横方向に数段転がして羽状縄文を作っているが，V20ではほぼ同じ長さずつ縦と横交互に施文して羽状縄文を作っている。磨き調整のある破片は13片で，そのほとんどが幅約0.3 cm の原体を用いている。器壁の厚さはほとんど0.5～0.6cmであるが，深鉢F類のV13だけ0.3cm



第39図　北白川上層式土器



の変遷（Ⅶ1～Ⅶ12は〔中村74b〕より引用，縮尺：復原実測図1/8，ほか1/4）

と極めて薄い。

ここで分類が可能であった土器は27個体で，深鉢A類３点，深鉢B類１点，深鉢C類２点，深鉢D類１点，深鉢E類１点，深鉢F類１点，深鉢G類10点，鉢A類羽状縄文土器３点，鉢A類斜行縄文土器２点，鉢B類１点，浅鉢２点であった。以上の分類をもとに，北白川扇状地のほかの遺跡との比較を次節でおこなう。

2　北白川扇状地の北白川上層式土器

北白川扇状地で，縄文後期北白川上層式土器が出土した遺跡は，本遺跡を含め５遺跡である。本遺跡を除いた４遺跡は，異った内容を持つ２群に分けることができる。北白川小倉町遺跡〔梅原35〕と北白川別当町遺跡〔横山・佐原60〕が１群をなし，京大植物園遺跡〔中村74b〕と北白川上終町遺跡〔梅原35〕が別の１群である。ここで，北白川小倉町遺跡と京大植物園遺跡から出土した北白川上層式を両者の代表として，前節の分類に従って分類と考察を試みる(第39図)。

深鉢A類　京大植物園遺跡には，頸部の外側に粘土紐を貼り付け，波状の幅の広い口縁部を作り，波頂部に渦巻文を配してその間を弧状文で埋め，頸部と胴部に数条の斜線文を主として描くⅦ１と，断面T字型の口縁部に，磨消縄文を施した長方形区画文を連ねたⅦ２とがある。両者とも頸部は比較的直立している。またⅦ１の口縁部と胴部の文様は堀之内Ⅰ式に類似している。一方，北白川小倉町遺跡からは，頸部との境が明瞭でないやや肥厚した口縁部に，同心円文と斜線文を施したⅥ１と，断面T字形の口縁部に，磨消縄文のある長方形区画文を描き，波頂部に刺突のある８字状の浮文をもつⅥ２とが出土している。頸部は京大植物園遺跡のものよりやや外反する。

深鉢B類　両遺跡とも出土例はA類と比べて少ない。京大植物園遺跡のⅦ３は，内面が肥厚して頸部との間に段をなす口縁部で，そこに２本の平行沈線を施し，縄文を転がしている。北白川小倉町遺跡のⅥ３は口縁部が肥厚せず，２本の平行沈線を施して，沈線の間に縄文を転がしている。

深鉢D類　京大植物園遺跡には，短く内折する口縁部をもち，胴部に多重三角形文や渦巻文などを施すⅦ４や，刻みのある隆線が垂下するⅦ５がある。北白川小倉町遺跡のⅥ４は，やや内折した口縁部をもち，２本の沈線で囲まれた磨消縄文帯で，三角形文や渦巻文を描き，口縁部に刻みのある隆線が巡る土器である。Ⅵ４と同様の文様構成で沈線が３本以上と思われるⅥ５も出土している。

深鉢E類　京大植物園遺跡出土のⅦ６や北白川小倉町遺跡のⅥ６も口縁部が外側へ肥

厚する土器である。

深鉢F類　京大植物園遺跡のⅦ7も教養部構内AO24区のⅤ13と同様に薄手である。

深鉢G類　京大植物園遺跡のⅦ8は，ほぼ直立した口頸部にやや膨らんだ胴のつく深鉢で，口縁端部を丸く収めている。調整は内外とも巻貝条痕である。この類は変化に富んでいるが，口縁部の形はⅦ8に類似したものが主体をなす。ただし調整は，巻貝条痕，二枚貝条痕，擦痕，撫で，刷毛目など多様である。北白川小倉町遺跡のⅥ7とⅥ8は，やや外反した頸部に肥厚した口縁部がつき，調整はⅥ7が条痕，Ⅵ8が撫でである。

鉢A類　京大植物園遺跡出土のⅦ9・Ⅶ10，北白川小倉町遺跡のⅥ9とも口縁部はほとんど直立し，内面に文様をもつものはない。胴部に羽状縄文を施す土器は，京大植物園遺跡ではⅦ11の1片のみとごくわずかであるが，北白川小倉町遺跡ではこの類に属する2点が2点とも羽状縄文である。またⅥ9は口縁部が肥厚する特徴がある。

鉢B類　京大植物園遺跡出土のⅦ12は，鉢A類と同様の器形で，胴部に曲線的な沈線文が施されている。

以上のように，京大植物園遺跡と北白川小倉町遺跡，教養部構内AO24区の出土土器は，基本的には同一の器種の組合せからなっている。しかし，個々の土器には変化を認めることができ，次節で3遺跡の年代比較をおこなうこととする。

3　北白川上層式土器の細分

第1節と第2節の分類をもとに，京大植物園遺跡出土の土器を第1群土器，北白川小倉町遺跡出土の土器を第2群土器，教養部構内AO24区(以下京大教養部遺跡とする)出土の土器を第3群土器と呼ぶことにする。第1群，第2群，第3群土器の器種の組合せはみなほぼ同じであるが，それぞれの器種ごとに，文様や器形に若干の違いが認められる。それらの遺跡は同じ扇状地上にあり，この違いを年代差として差し支えあるまい。以下，第1群，第2群，第3群の土器を比較する(第39図)。

深鉢A類で，口縁部が肥厚するものは第3群にはなく，口縁部に円形ないし8字状浮文をもつものは第2群と第3群土器にある。口頸部の立ち上りかたをみると，第1群が垂直に近いのに対して，第3群は強く外反し，第2群はその中間である。深鉢B類は，内面が肥厚し口頸部があまり外反しない第1群土器と，強く外反し文様が磨消縄文帯である第3群土器とに分れる。深鉢D類は東日本系の土器で，第1群が堀之内Ⅰ式，第2群が堀之内Ⅱ式，第3群土器が堀之内Ⅱ式～加曽利BⅠ式にあたり，年代差が明確である。鉢A類も深鉢A・B類と同様に，口頸部の立ち上りが，第1群は垂直に近く，第3群は強く外反す

る。第3群のこの類には，口縁内面に縄文帯がくるものもある(第38図V6)。また，第2群の鉢A類は口縁部が外へ肥厚する特徴があり，深鉢G類と同じく他の群の土器と区別できる。深鉢G類は，口縁部の形態で区別できる。第1群の土器は素縁で端部を丸く収めているが，第2群の土器は口縁部が肥厚するものが多く，第3群の土器は内面の撫でによって，外反気味に薄く仕上げているものが多い。

縄文の撚りにも変化が認められる。第1群土器は実見した縄文をもつ土器38点のうち，RL 16点，LR 22点であった。ただし，38点中には堀之内I式系の土器が10点あり，そのすべてがLRであったので，実見した土器が片寄ったと考えると，RLとLRはほぼ同量ではないかと思う。第2群土器は38点のうち，RL 8点，LR 30点であり，第3群土器は10点すべてがLRである。したがって撚りの方向でも，第1群から第2群を経て，第3群へと除々にLRの撚りが増加したといえる。(1)

以上のように，北白川上層式は3群に分けることが可能であり，第1群⟶第2群⟶第3群の順序に変化したと考えられる。変化の方向は，口縁部文様帯の縮少と，文様の簡略化であり，縦方向の文様から横方向の文様への転換である。また，口頸部の外反に伴い口縁外面の文様が見えにくくなるためか，断面T字形もしくは内折L字形口縁が増加し，口縁内面に文様を施す土器も多くなると理解できる。

以上3群の土器は，第1群が縄手I式にあたり〔藤井・原田71〕，第3群が桑飼下式の主体となる土器群にあたる〔渡辺ほか75〕。第2群土器は純粋に出土した資料は少ないが，東大阪市縄手遺跡や舞鶴市桑飼下遺跡に散見できる。したがって，北白川上層式の三分は，近畿地方全域に広げることは可能と思われるが，桑飼下遺跡第4群深鉢D類，および大阪府岬町淡輪遺跡出土の櫛描文注口土器(2)は北白川扇状地では未発見であり，今後の検討を要する課題である。北白川小倉町遺跡と京大教養部遺跡出土土器は，標準資料としては量が少なく，前述の問題とあわせて，厳密な型式の設定は今後の調査・研究にゆだねるべきであろう。なお，本稿の製図は清水芳裕氏によるもので，感謝の意を表するしだいである。

〔注〕

(1) 一方，京都市一乗寺向畑遺跡北地点の土器（一乗寺K式）は20点のうち，RL15点，LR5点，同南地点の土器（元住吉山I式）は8点のうち，RL2点，LR6点である。

(2) 大阪府泉北考古資料館の所蔵品である。最近出版された概要にはこの型式のものはみあたらない〔大野79〕。